

# 金融市場動向 (平成3年3月)

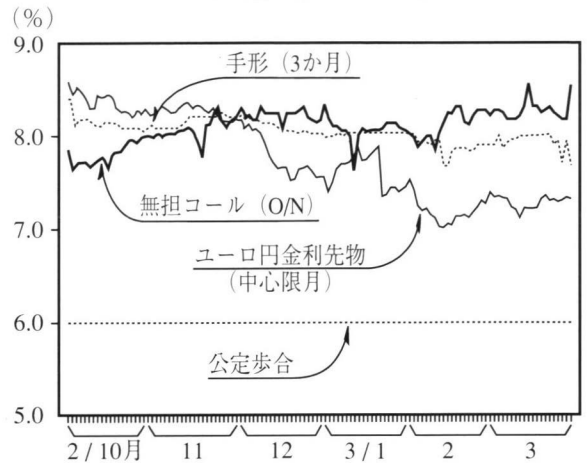
## 1. 短期金融市場

3月中のオーバーナイト・レート（無担コール）は月央と月末に上昇をみたほかは、小動きに推移した。この間、ターム物（手形3か月物）は横ばい圏内の動きとなったが、月末に向けて低下した。この間、ユーロ円金利先物は小幅の動きにとどまった。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は34兆7,179億円と前月（34兆8,948億円）比ほぼ横ばいとなった。

なお、3月からコール資金取引の担保として外貨手形が加わった。またTB市場において証券金融会社による貸借仲介業務が開始された。

短期金融市場金利



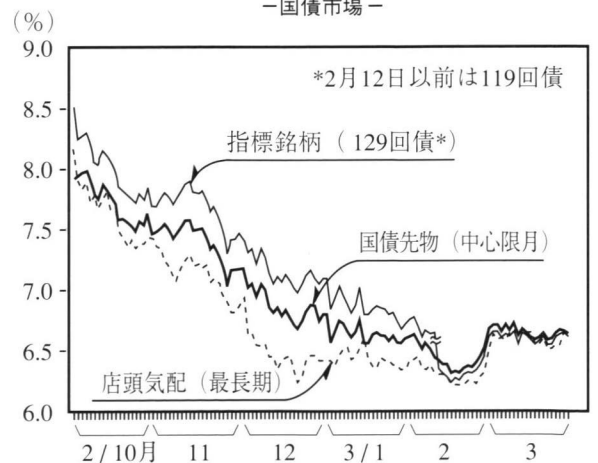
## 2. 資本市場

3月の債券利回り（129回債）は、月初に米国長期金利の上昇や為替円安を背景に上昇したが、その後は狭いレンジの中での動きとなった（月末6.61%＜前月末6.45%＞、国債先物中心限月6.65%＜同6.53%＞）。

国債出来高をみると、現物（店頭取引）は前月を下回ったが、先物は前月を上回った。

株式市況（日経平均株価）は、米国株価の上昇等に伴い上伸し、18日には昨年8/16日以来の27千円台を回復した。しかし下旬には米国金融緩和予想の後退や同株価の反落から弱含みに転じ、結局前月末（26,409円）を若干下回る26,292円で越月した。

既発債市場利回り  
—国債市場—



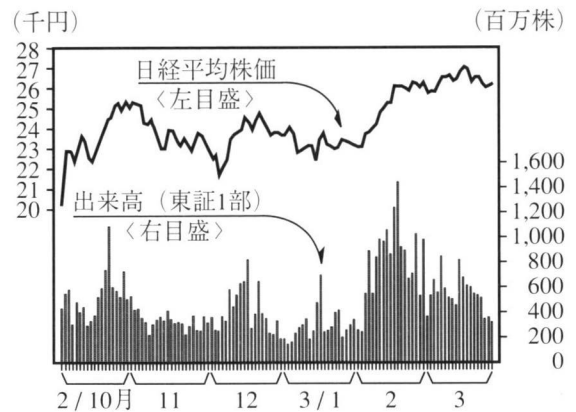
株式出来高（東証第1部 月中1営業日平均出来高）は、5.5億株と前月（8.1億株）を下回った。

3月の起債動向をみると、6か月物短期国債が2回発行され（2回目は湾岸地域における平和回復活動に対する資金拠出目的）、金融機関、証券会社が総じて積極的に応札した（募入平均利回り 7.442%、7.359%、応募倍率 1.83倍、2.30倍＜前月6か月物2.20倍＞）。

エクイティ市場での発行（3月払込み分、国内分）については、国内ワラント債が5か月連続して発行皆無となるなど依然低調な動きとなった。

国内公募事業債の発行は、クーポンレートが6か月ぶりに上昇した（2月6.6%→3月6.7%）ものの、主力電力会社の起債枠消化の動きなどから前月比増加した（2月1,950億円→3月2,450億円）。

株式市場



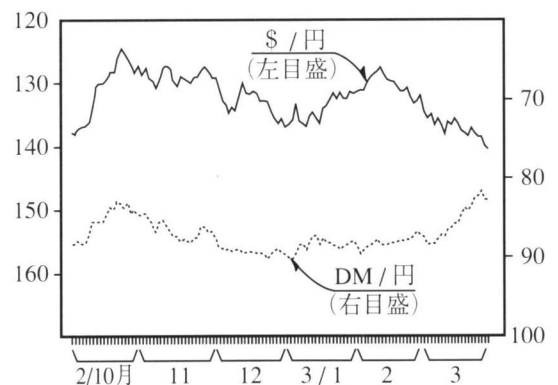
### 3. 外国為替市場

3月の円相場（対米ドル直物相場、終値）をみると、米国景気回復予想が台頭するなか、ドル高マルク安の動きにつられるかたちで軟調に推移し、月末にはほぼ半年ぶりの140円台となった（140.55円）。

また、円・マルク相場（ニューヨーク市場、終値）は、ソ連情勢やドイツ経済に対する不透明感が強まるなか、円が強含みの展開となった。

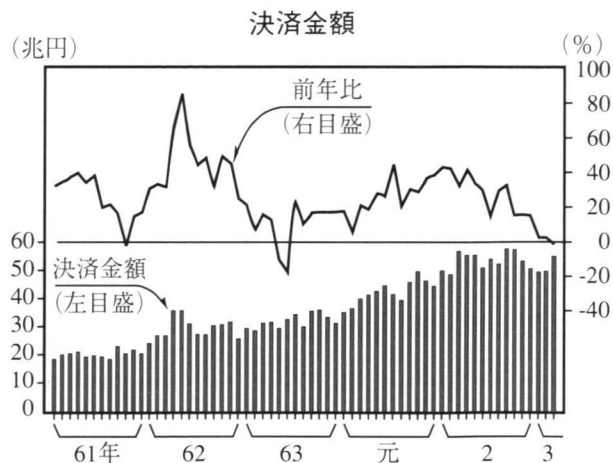
この間、外国為替市場出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は247.5億ドルと前月（216.5億ドル）を上回った。

外国為替市場



#### 4. 決済

3月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）、日本銀行当座預金受払額は前年を下回った（手形交換 前年比△8.7%、日本銀行当座預金受払 同△6.0%）。全銀システム取扱高、外為円決済交換高は前年を幾分上回った（全銀システム 前年比+1.5%、外為円決済 同+0.5%）。国債の決済金額（1営業日平均、移転登録および振決済口座振替）は前年を大きく上回った（+29.4%）。



(注) 1. 1営業日平均。  
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

#### 5. 資金需給、金融調節

3月の資金需給は、2兆8,359億円の不足と前年（7,611億円の余剰）とは様変わり的大幅不足となった。これは、銀行券要因については7,560億円の不足と前年（同1兆7,696億円）比不足幅を縮小したものの、財政要因が運用部の債券運用の期落ち到来や郵便局の払い超幅縮小により1兆5,296億円の不足（前年は2兆8,739億円の余剰）となったことが影響した。

これに対し日本銀行は、FBの買戻しを中心に資金を供給した。

4月の資金需給（国債発行織込み前）については、銀行券要因は6,000億円程度の不足（前年同1兆1,112億円）と見込まれるが、財政要因は、申告所得税を中心とする税揚げにもかかわらず、地方交付税交付金や公共事業費の支払いが重なることから4兆7,800億円程度の余剰となる見通し。この結果、4月は、月中4兆3,300億円程度の資金余剰と予想される（前年 同6兆2,075億円）。

#### 6. マネーサプライ、銀行券、預金

2月のM<sub>2</sub>+CD平残前年比（速報）は、+5.4%と前月比2.0%ポイント低下した。これは、主に金融機関による貸出の伸び率低下やCP保有の減少が影響したもので、通貨種類別にみると、準通貨の伸び率が大口定期預金を中心に大きく低下したほか、預金通貨もかなり伸び率を下げた。

3月の銀行券平残前年比は、+3.2%と前月(+3.2%)に続いて低い伸びとなった。

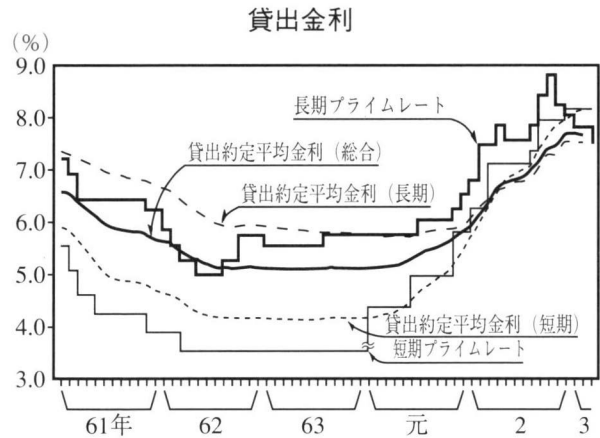
2月の自由金利預金残高（全国銀行における大口定期、MMC、小口MMC、外貨預金の合計）は、小口MMCが増加したものの、ウエイトの高い大口定期に加え、外貨預金も減少したことから全体では前月比△0.4%と減少した（2月平残は274兆8,715億円）。

## 7. 貸出・預金金利

2月中の貸出約定平均金利（全国銀行）は、長・短総合では前月比横ばいとなった（1月7.693%→2月7.693%）。短期金利は2年12月に実施された短期プライムレート引上げが引続き浸透したことから上昇したが、長期金利は2/11～3/1月の3か月連続の長期プライムレート引下げが影響し、小幅の低下となった。

なお3月1日には長期プライムレートが引下げられた（7.8%→7.5%）。

この間、2月の大口定期預金金利（3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利）は、前月比△0.183%ポイントと5か月連続して低下した（1月7.965%→2月7.782%）。



(平成3年4月9日、調査統計局)